

「私の第一声⑩」

【テニスを楽しむためにコンタクトレンズを買いに行く】

大学に入学した私は、ようやく念願のテニスに打ち込める…はずでしたが、二浪している間に体育会系のテニス部に入る気力はなくなっており、テニス以外にもいろいろ楽しむサークルに入ります。それでも、競技として真剣に取り組みたいと考えていた私は、バイト代を貯めて、当時まだ出始めだったコンタクトレンズを買いに行きます。

私は視力に課題があり、高校時代のクラブ活動で、日が暮れて暗くなってくるとよく空振りをしていました。左右の視力に大きな差があり、普段はメガネで対応できるのですが、光量が落ちてくると、メガネの矯正力では、遠近をとらえにくくなり、空振りしてしまうのです。

【視力回復訓練】

母は、私が4歳の頃、私の左目がほとんど見えていないことに気づきます。それまでほぼ右目だけで見ていたことに誰も気づきませんでした。「使わなければ視力が出ない」と医師に言われ、左目をつかう訓練開始です。まず自分で右目を隠します。母が、数m離れた所で一辺15cm程の紙製サイコロの6つの面を順番に見せます。私は懸命にサイコロに書いてある記号を左目で見ます。視力検査の「C」のような記号(ランドルト環)の、輪の切れている方を「右」「上」等、伝えます。ギリギリ見えるか見えないかの距離で訓練するので、イライラします。早く終わりたいとこっそり右目で見てみると、母にバレて怒られます。

その時の母はとても怖かった。母も必死だったのです。当時「よく4歳までに気づいたね」と母をほめてくれる医師がいる一方、「もっと早く気づけば、回復も早かったのに」と言う医師もいたそうです。私の視力の低いことを自分の責任と感じ、とてもつらかったそうです。

【「めがねくん」と呼ばれて】

普段から少しでも左目をつかうために、4歳からメガネをかけ始めます。視力を出すため、左右の視力差を矯正せねばならず、長時間メガネをかけていると気分が悪くなり、しんどかった記憶があります。

また、この年齢からメガネをかけている子は当時もまれだったので、よく「メガネくん」と呼ばれていました。今から考えれば、失礼な呼

び方です。当時の私は、あまり気になりませんでした。両親がどんな思いでいたのか考えると、悲しくなります。

後日、教員になり、障がい理解教育のため車いすユーザーの方からお話をきく機会がありました。その時に「車いすの人、と言われることに違和感がある。車いすを使うことは私のたくさんある個性のうちほんの一部に過ぎない」とおっしゃっておられ、私自身が「車いすの方」という言い方をしていたので、ドキリとし、自分はメガネで、同じ思いをしていたはずなのに、と悔しかったです。そう考えると、あだ名も本当に難しい。どう呼んでほしいか、呼ばれる本人が決めて、みんなに伝えるのが1番かも知れませんね。

【視力の逆転現象】

小学校4年生の時、これ以上の回復は難しいということで、訓練は終わります。中学2年生のある朝、眠い目をこすっている時、自分の左右の視力に違和感があります。右の方がよく見えるはずなのに、左の方がよく見える。慌てて、久しぶりに眼科に行きました。4歳のころ全く視力のなかった左目の視力は、その頃には0.1くらいまで回復していました。ところが、右目がそれ以下になり、逆転していたのです。医師には「右目だけを酷使していたため、もっと落ちていく可能性がある」と言われました。「使わなければ視力が出ない。使いすぎると視力は落ちる。どっちやねん！」と心で突っ込んだのを覚えています。確かにどんどん落ち、現在右目の視力は0.01もないのです。

【コンタクトレンズを買って】

大学生になり、当時ソフトコンタクトよりまだ目の健康によいとされていたハードコンタクトを買いに行きました。長年連れ添ったメガネともオサラバ、と思ったのも束の間、目がゴロゴロし全く合わない。血走った目で必死に頑張ったのも1か月。メガネとよりを戻しました。

今では、メガネの形のネクタイピンなど、メガネグッズを買うのが趣味になり、メガネライフをエンジョイしています。

【不定期コラムNo.23】へつづく

第三中学校ホームページ

では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

貝塚第三中学校HP



貝塚第三中学校HP